

世紀転換期におけるピエール・ボナールの窓のモチーフに関する考察

—1896年《中庭に面した家》と1900年《画家のアトリエ》を中心に

吉村真（早稲田大学）

ナビ派の一員として知られるフランスの画家ピエール・ボナール(1867-1947)は、その画業を通じ貫して「窓」という対象に関心をよせていた。

カタログ・レゾネ等によれば、ボナールは1896年から1946年までに、窓を主要モチーフとする作品を約四十点制作している。発表者が検討した限り、これだけの数の窓の絵を残したフランスの画家は、ボナールとその同代人であるマティスら以前にはいなかったと思われる。先行研究においてもボナールの窓の重要性はクレールらによりすでに指摘されている。だがその言及は断片的で、もっぱら1920年代以降の作品を対象をしぼっていた。近年にはキルヒェラートがボナールの全画業における窓をテーマにした論考を書いたが、紙数が少なく作品の分析・解釈が十分になされていない。そこで本発表では世紀転換期の1900年前後に制作されたボナール初期の窓の絵を扱い、当時の文脈にそって彼がこのモチーフにいかなる役割を見出したかについて考察する。

室内側から見た窓をモチーフとする最初のボナール作品は、版画集『パリ生活の諸相』（1899年刊）のために制作された1896年のリトグラフ《中庭に面した家》であり、これは十九世紀後半に建てられた集合住宅に面するボナール自身のアトリエの窓を、開いた状態で表したものである。しかし彼は1900年の油彩《画家のアトリエ》において、同一の窓を今度は格子付ガラス戸が閉じられた状態で表しており、その後1910年頃までパリの自宅の室内を描く際は、つねに窓のガラス戸を閉じている。この窓の開閉の選択は着目に値する。というのも当時、彼の周辺で窓の開閉という事柄は、主題の「アンティミテ（親密性）」と絵画の自律性という問題に関する重要な比喩として用いられていたからだ。

例えば彼の友人の作家ジッドは1895年の小説『パリュード』で、密室の文学サロンに息苦しさを覚えて窓を開けるも、パリのよそよそしい光景に怯えて再び窓を閉める詩人の話を語っている。また同年ナビ派の仲間ドニは、再現性を重視するリアリズムや印象派の絵画を「開かれた窓」に過ぎないと批判し、閉じた窓のように平面的な絵画に固有の秩序を求める文章を書いている。一方ボナールは1895年頃の多くの作品で、活気に満ちたパリの街をスケッチ風の無秩序な筆致で描出していた。しかし《中庭に面した家》に関しては、窓枠の効果によって同時期の他の作品にはない疎外感や構図の幾何学性が生み出されている。この疎外感と幾何学性は、《画家のアトリエ》になると格子付ガラス戸によってさらに強調されている。おそらくボナールは世紀転換期のパリにおける室内＝親密圏と屋外＝公共圏の相互疎外的な緊張した並存を象徴的に表象し、かつその光景の中に無理なく幾何学的秩序を付与する機能を閉じた窓というモチーフに見出したのではないか。